



信楽焼 — その技術と歴史 —

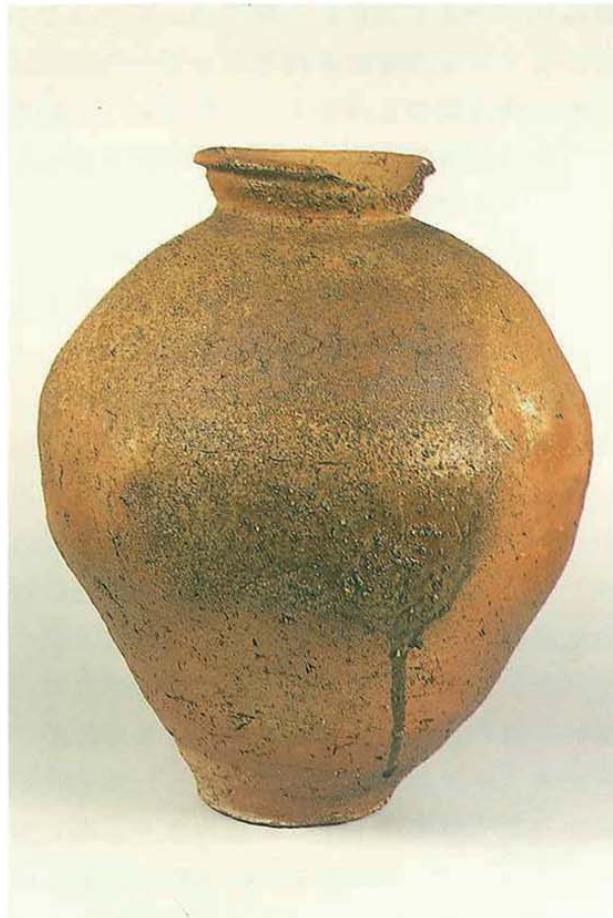
滋賀県立陶芸の森
学芸員 大槻 優子

信楽という地

滋賀県の西南部に位置する信楽町は、現在も日本有数の窯業地として世界的にも知られています。信楽町は、現在の琵琶湖の前身である古琵琶湖が隆起してできた山地に立地します。古琵琶湖には、現在の琵琶湖付近にあった山脈から流失した堆積土が集積し、やきものに適した木節粘土や蛙目粘土となりました。またこの地を囲む方々の山からは、やきものの燃料に適した薪を豊富に得ることができたのです。さらに信楽は方々を山に囲まれた山里です。しかし近江(現:滋賀県)、大和(現:奈良県)、山城(現:京都府)、伊賀(現:三重県)の四つの国境にあたることから、古代より多くの人々の往来がありました。奈良時代には紫香楽宮の造営が計画されたこともあります。天平15年(743)には大仏建立の詔も出されています。信楽において紫香楽宮の屋根瓦がつくられ、これこそが信楽焼の起源であると考える説もあります。このような歴史的、地理的条件を背景にして、信楽は日本を代表する窯業地となつたのです。

信楽焼のはじまり

信楽焼は、いつ頃からつくられるようになったのでしょうか。滋賀県内の数か所では5世紀末頃から須恵器がつくられていました。須恵器とは、灰色の陶質土器のことです。朝鮮半島の製法が伝來したものと考えられています。それまでつくられていた土師器に比べて制作技術は進歩し、良質の土を使ってろくろで成形され登り窯を使用し釉薬をかけずに1,000°C以上で焼成されました。全国的に須恵



信楽大壺(室町時代) 滋賀県立陶芸の森所蔵

器は遅くとも12世紀中頃には終焉を迎え、かわって中世陶器や中世須恵器などが出現します。しかし滋賀県内の主に湖南地方では、13世紀初から中頃までは引き続きつくられていたようです。これら須恵器の窯が信楽もしくは信楽周辺にあった可能性が高いこと、またその終末時期から推察して、おそらく信楽焼はこの須恵器の技法を受け継ぎ、鎌倉時代、13世紀末頃に始められるようになったと考えられます。しかし現在のところ信楽焼がこの古代窯業とどのようにつながるのかを示す遺

例は明らかにされておらず、断定はできません。残念ながら信楽焼がいつどのようななかたちで開窯したのか、実態はよくわかっていないのです。今後、信楽の開窯につながる、初期窯の発掘調査が待ち望まれます。

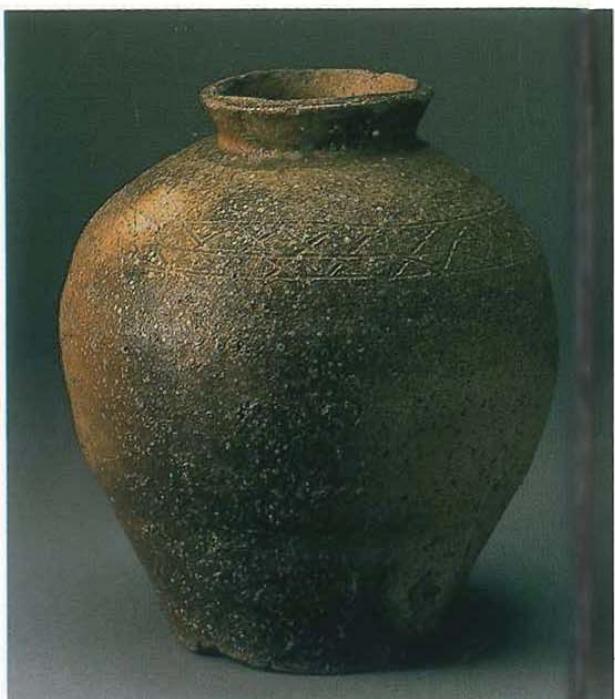
初期の信楽焼

これまでの調査によって、製作年代が鎌倉時代まで遡るとみられる信楽焼の遺例は数点知られています。しかし史料的に確実なものは少なく、現在確認されているもの多くは室町時代以降のものです。伝世品のうち紀年銘資料（直接年号が記されたもの）の最も古い例は、室町時代の応安二年（1369）銘の甕です。伝世品からみてこの時代の信楽では、甕、壺、鉢を中心に生活雑器がつくられていきました。この三種の器は貯蔵や調理用として庶民の生活に欠かせないものでした。

鎌倉時代から室町時代にかけて、信楽以外にも日本中に無数の窯が煙を上げていたことが知られています。これらの中世窯の多くは甕・壺・すり鉢など一般庶民向けの生活雑器を生産していました。しかし低質の器しかつくれなかった多くの窯はやがて姿を消してしまい、質の良いやきものを生産することができた六つの生産地が生き残りました。それが信楽（現：滋賀）・瀬戸・常滑（以上、現：愛知）・備前（現：岡山）・丹波（現：兵庫）・越前（現：福井）で、一般に「六古窯」とよばれています。中でも常滑焼は高い流通シェアを誇り、六古窯の中でも一番盛んでした。13、4世紀の初期の信楽製品にはこの常滑焼の強い影響が感じられます。このため信楽焼は常滑焼の支窯として開窯したという説さえあります。

しかし14世紀後半になると常滑焼をはじめ尾張地方の窯は急速に衰えはじめました。これに伴うように消滅してしまった多くの窯もありましたが、信楽や丹波、越前などの窯は常滑焼の影響を脱して、徐々にそれぞれ独自の新しい様式をつくりあげていったのです。

15世紀になると信楽では、すり鉢が主力製品となりました。中世・近世を通じて食べ物をすりつぶして調理することが多かったため、すり鉢の需要は高く、九州から東北まで多くの窯でつくられました。なお信楽焼のすり鉢の流通範囲は狭く、南近江、京、北大和、伊賀など近隣が中心でした。



「信楽檜垣文壺」（室町時代） 滋賀県立陶芸の森所蔵

またこの頃の信楽焼で特に知られているのは「檜垣文」です。他の中世窯の製品が、線彫りやスタンプ、叩き目などで文様が施されることが多かったのに対し、信楽焼には裝飾文様はほとんど見られません。しかし唯一見られるのが檜垣文で、14世紀から15世紀にかけてつくられた壺の肩部分に多く描かれました。この檜垣文は信楽独特の文様であると考えられています。

茶陶と信楽

先に述べたように14世紀後半、信楽焼は常滑焼の影響から離れ独自の展開をみせました。白い長石粒を含んだ良質の土からつくられた信楽焼は、釉薬をかけずに焼締められ、土肌はほんのりと赤い火色に焼上がり、これに薪の灰が溶けてできた萌黄色の自然釉や、黒い灰かぶりが加わり、地味ながら深いあじわい

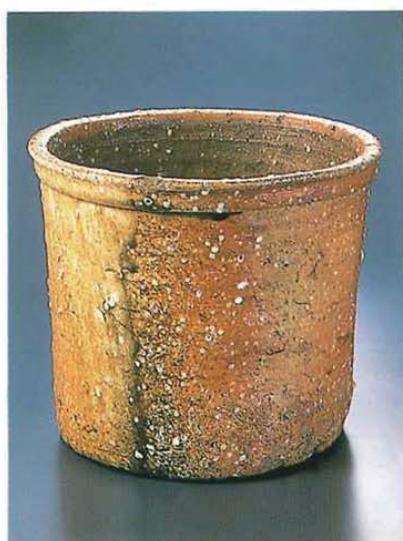
をかもしだしていました。15世紀の後半、このような信楽焼の作風が、当時流行していた「侘茶」の茶人たちの目にとまりました。「侘」とは隠者の生活の中から見い出されてきた自然質朴な美を基とした美意識で、茶道の展開と共に確立されたといえます。この侘茶の茶人たちが信楽の雑器に「侘」に通じる冷え枯れた美を見い出し、見立て道具として茶の湯に用いたのです。

茶陶に取り入れられてからの信楽がはじめて記録にあらわれるのは、茶人村田珠光（1423～1502）の手紙（「心の文」）の文中です。

「一前略一 当時ひえかるると申して、初心の人躰がびぜん物、しからき物などをもてて、人もゆるさぬたけくらむ事、言語道断也 一後略一」

「侘茶の心がまだ理解できていない初心の者が、冷え枯れたるものとして、備前焼や信楽焼を用いるのは、言語道断である。」というような意味のことが記されています。この手紙が書かれた15世紀後半、すでに茶人たちの間で、信楽焼が珍重されていたことが伺えます。そして見立ての茶道具としての信楽焼は、村田珠光にはじまり、武野紹鷗（1502～1555）、その弟子である千利休（1522～1591）らにも受け継がれました。特に代表的なものをあげておき

ましよう。「信
樂鬼桶水指」
と呼ばれて
いる桶型のやき
ものは、もと
は苧（麻の一
種）をほぐす
ための「苧桶」
でした。これ
が「鬼桶」と
名付けられ、
水指に転用さ



信楽鬼桶水指(桃山後期～江戸時代初期)
滋賀県立陶芸の森所蔵

れたのです。また、もともと農家で種壺として使われていた信楽焼の小壺は、人がうずくまっている姿に似ていることから「蹲」と名付けられ、茶室で花入として使われました。こうした茶の湯の流行と共に次第に雑器の転用では間に合わなくなり、紹鷗のころから茶人たちの好みに合わせた信楽焼が茶陶としてつくられるようになりました。茶陶に取り入れられてからの信楽は有名茶人の好みという理由で、俗に紹鷗信楽、利休信楽などと呼ばれていますが、茶人たちと産地信楽との直接の注文関係については不明です。こうして16、17世紀には茶道具が多く生産され、信楽焼は黄金時代を迎えたのでした。

江戸時代の信楽焼

江戸時代に入ると京都などでも信楽焼の作風を写した茶陶がつくられるようになりました。新兵衛信楽、仁清信楽などの名で知られているものが代表的です。これらは京都の土を使ったものと思われますが、江戸時代後期の陶工欽古堂亀佑の書『陶器指南』では、信楽長野村の土を原料とする古信楽の製法が記されています。したがって信楽以外でも信楽焼風ともいいうべき茶陶がつくられていたわけですが、いずれにしろ、他地で写しがつくられるような名陶として、信楽焼が当時の人々に憧れの目をもって認識されていたことが伺えます。

しかし茶陶の産地としてその名を馳せた信楽も、江戸時代初期以降、壺や甕など生活雑器の生産が中心になり、茶器はしだいにつくられなくなっていました。そして元禄年間頃からは、それまでの焼締陶にうってかわって、釉薬を施した小物類がつくられるようになります。18世紀には若松文様をほどこした若松碗や丸碗など小さな碗類が、19世紀になると神仏具や灯明皿、土瓶などがつくられるようになりました。またそれまでの穴窯に代わって、全長が長く一度に大量に焼成することができる登り窯が中心となつたことから生

産量も増大しました。大量に信楽でつくられた生活用器は、この時代に国内に広く流通しました。

もうひとつ江戸時代の信楽は茶壺の製造で知られます。15世紀の『桂川地蔵記』にも信楽焼の茶壺が優れていることが記されています。二代将軍徳川秀忠の時代、初めて将軍家から信楽に茶壺の注文が下されました。その後寛永9年（1632）三代将軍家光に信楽の茶壺が献上されて以降、信楽から将軍家への献上が制度化されました。将軍家御用の茶壺には宇治の献上茶が詰められ、幕府の権力を誇示するための御茶壺道中がおこなわれました。「ズイズイズッコロバシ胡麻味噌ズイ茶壺に追われてトッピンシャン」と歌われたように、御茶壺道中は一般民衆たちを苦しめ、多くの弊害を生みました。この献上茶壺は規格が決められており、四つの耳が付き、上部は褐色釉、下部は並白釉の掛け分けでした。その姿から「腰白茶壺」とよばれています。諸大名たちも将軍家にならって信楽に茶壺を注文しましたが、階級によって寸法などが違っていたようです。献上茶壺の制作は御用茶壺師に指定された窯に下命され、そこに属する特定の陶工が制作にあたりました。これが大きな利益となつたようで、制作を独占していた信楽の長野村と制作を望む黄瀬村との間で、茶壺の製造権をめぐって訴訟が起こされたこともあります。



19世紀末頃につくられた若松碗

またこの時代、特記すべきこととして、文

化7年（1810）、信楽の陶工に朝鮮通信使の接待のための食器が注文されたことがありました。通信使は、徳川将軍の代替わりのたびに祝賀使節として招かれたもので、大切な客人がありました。いわば特別待遇であった朝鮮通信使を迎えるための食器が、信楽に注文されたことは注目に値します。

近代以降の信楽焼

近代に入ると、信楽は良質の土と大型の登り窯そして優秀な陶工たちの活躍を背景として、大物のやきもの産地として知られるようになります。皆さんよくご存じのたぬきの置物も、明治時代初頃、大物制作の技術を活かしてつくられました。しかし特に近代信楽の盛況のきっかけとなったのは、明治時代中頃からはじめられた火鉢の製造です。大正時代から昭和前期にかけて、火鉢は信楽の主要製品で、一時は全国の90%を生産していました。火鉢専用の8トン貨車が毎日40両ほど走っており、駅のホームは貨車の順番待ちの火鉢でいっぱい、一般乗客は隙間をぬってホームを歩かなければならなかったといいます。また窯元では生産が間に合わず、年中火鉢を生産していて、暑い夏の季節の火鉢つくりは大変だったそうです。しかし昭和26年頃から石油ストーブの普及により、火鉢の生産は急激に落ち込んでいきました。

しかし、その後も信楽では、大物つくりにも適した良質の土を活かして植木鉢、ガーデンセット、傘立て、建築タイル、また小物でも茶陶、花器、和食器など常に時代のニーズに合わせた製品を模索しながら制作を続けています。また芸術分野でも多くの作家たちが活躍する全国有数の窯業地としても注目をあび、現在にいたっているのです。

滋賀文化財教室シリーズ No.171号

発行年月日 1997年11月25日
編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会
〒520-21 大津市瀬田南大萱町1732-2
TEL(077)548-9780 FAX(077)543-1525